



充実した学びの場である 国文学専攻

文学部人文社会学科国文学専攻4年

金子 瑞葵 (埼玉県立不動岡高校)



ゼミナールでの街歩き (神田明神にて)

年次で卒論を書くと進めま

幼い時から本の虫で、小学生の頃は二宮金次郎と呼ばれた私が18歳で中央大学の赤煉瓦に足を踏み出してから、3年の月日が流れました。至極単純に「好きだから」という理由で選び、まさに光陰矢のごとし、と言わんばかりに過ぎてきた充実した学びの場である文学部人文社会学科国文学専攻について、お話ししたいと思います。

国文学専攻という名の通り、上代から近現代に至るまで連続と続く文学作品や漢文、言語学について学ぶことができます。オープンキャンパスの学生相談員などを担当した時には「古文を学ぶ際には歴史的仮名遣いや古典文法をマスターしていないといけませんか」という質問をいただきましたが、このようなイメージを持たれている方も多くはないでしょうか。しかし、全くそのようなことはありません。国文学専攻では高校段階で学ぶ形式的な部分だけではなく、もっと深い文学や言語学の本質的な部分を教授いただく講義が行われています。大きく分けると1、2年次では広くさまざまな年代の文学を学びつつ、演習などを繰り返して研究の仕方を学んでいきます。3年次から自分の興味のある分野のゼミナールを選んで掘り下げ、4年次で卒論を書くと進めま

自身は1年次の担任をしていたいた鈴木俊幸先生の専門である近世文学(江戸時代の文学)の「意気」の精神性に惹かれて、3年次で近世ゼミナールに入りました。普段の講義では鈴木先生からいただく1冊の草双紙をゼミ生で分担し、読み解いていきます。草双紙の絵から当時の文化や風俗を読み解いていくことを『絵解(えとき)』というのですが、ほんのわずかなペー

ジ数の絵から当時の流行や風俗、暮らし方や考え方までが垣間見える様はまるで魔法のようで、非常に興味深く、面白い世界です。4年次からは卒論を書き進めますが、鈴木先生は『文学に限定しなくて良いし、江戸時代で完結する文化でなくても良いので、自分ごととん愛を感じるものについて論じなさい』という方針です。3年生は4年次を意識しながら時代を相手取って各々が幅広い分野から自らの愛の対象を探しています。また、国文学専攻では人数制限がないため、現在、近世ゼミナールには国文学専攻の中で、ずば抜けて人が集まっています。『大学生』とひとくくりにされがちでも、印象派の絵画を構成する色とりどりの点描のように個性豊かな面々であるため、多種多様なゼミ生の話が聞ける点も個人的には非常に楽しい要因の1つです。

大学では、待っていても誰も「楽しさ」を与えてはくれませんが、能動的、主体的に動いていく人だけが、自分の世界を広げられるのです。3年間追い掛けてきた国文学は馴染みの日本語で構成されている上、私の苦手な数学は使いません。しかし厳しくて難しく、頭の中だけで完結するものでもありませんでした。足を使い、手を使い、時には議論して、初めてやっと尻尾を見せてくれる存在だったと思います。意外と体力派なのです。だからこそ知識を得る愉悦を私に教えてくれました。

日本が激動の歴史を過ごす中で、先人の知識人たちが遺していった「言葉の力」は今も息づいています。その思考や智慧を学ぶのは単純にもものすごく「楽しさ」に溢れていて、畢竟国文学専攻で得たものの中で一番大きな宝は、純粋な「楽しさ」を原動力にする力なのだと思います。この「楽しさ」を原動力に、力いっぱい学び続けたいです。



三重県伊勢市でのゼミ合宿

の
しな!
生活
vol.4

の様子を掲載し、ご父母の
キャンパスライフの風景、また
の情報を発信いたします。

文学部生 リアル 学生

文学部生のリアルな学生生活
皆様に文学部生の充実したキ
文学部ならではの取り組み等



「英語文学文化専攻」と聞いて、皆さんは何を思い浮かべるだろうか。「英語の勉強」や「読書」といった意見が挙がりそうだ。確かにそうした趣味的な側面はあるが、ここでの3年間はそれ以上のものを私にもたらしてくれた。私が学びの充実を感じる理由の1つがゼミだ。主にイギリス詩を中心に学んでいる。詩は、短い作品や意味が重層化した表現も多く、英語で書かれていて読むこと自体が大変だが、そこに私は詩の魅力を感じる。単語1つ1つに注目するようになり、言葉への感性が研ぎ澄まされた。詩人の人生を覗き、個性的な人生観を知ること、自分の世界も広がる。ゼミ以外の時間にも友達と詩の学びを深め合う。人の意見が聞くことで新たなアイデアが浮かぶこともある。逆に分の解釈に相手がある。このように、興味のあることについて自由に、かつ真剣に議論できる友達との時間も幸せだ。

この専攻に入ってからアメリカの面白さを知ったのも発見だ。アメリカはイギリスと比べ歴史が短い、世界のリーダーのような存在に至るまでに、人々の在り方や社会が目まぐるしく急速に変化を遂げてきたことが、その当時を生きた作家の小説に表れている。英語文学に対する視野が広がった。大学に入り、1つの夢も叶えられた。

憧れの国・イギリスへの2度の留学だ。1年次には、入学時成績優秀者スカラシップで浮いた授業料を留学の費用に充て、2年次には、短期留学プログラム給付奨学金を活用した。自分の努力次第で奨学金が得られる環境は非常にありがたい。1年次は、ロンドン大学ユニヴァーシティ・コレッジで音声学を学んだ。世界中からの参加者と一緒に学ぶというのは初めてで、どうしても外国の友人を作りたいと思い、ウェルカム・パーティーで勇気を出して、「隣に座ってもいいですか？」と声をかけた。それがきっかけで友達も次々にでき、現在も交流が続いている。



好奇心で駆け抜けた 大学生活

文学部人文社会学科英語文学文化専攻4年

よねざわ
米澤 りな (私立水戸薬陵高校)

UCLで友達になったスイス人のSarahと